

松山棟庵と成医会

—— 慈恵医大の源流を探る ——

慈恵医大が成医会講習所という小さい医学校にはじまったことはよく知られている。この講習所の設立にはもちろん多くの人に関与したわけであるが、とくに高木兼寛と松山棟庵の貢献は抜群であった。しかも松山はこの計画を積極的に高木に勧めた最高のブレーンであった。明治維新まもない日本には、まだ西洋医学を教育、研修するシステムが無かったので、この講習所の設立に辿り着くまでに、松山は多くの紆余曲折、試行と錯誤を繰り返していた。本小論の副題を「慈恵医大の源流を探る」としたのはそのためである。

1. 松山棟庵の修学時代

松山棟庵は1839（天保10）年9月17日、紀州高野山寺領荒川（現・和歌山県那賀郡安楽川）の医を業とする豪族の家に生まれた（豪族とは郷土、庄屋、大百姓などのこと）。

棟庵の祖父、松山永孝は由緒ある紀州津田家からの養子で、性は勤直、家宅の修理、家政の整理に手腕があり、ために家業が著しく栄えたという。

父の松山俊茂（1800-1885、松山家第十一代）は、永孝の六男であるが、四人の兄は死亡し、一人の兄は他家を継いだため当主になった人である。性質は温厚実直でとくに文学を好み、和歌をよくした。壮年になってから京都に出て当時関西第一の蘭方医と称された新宮涼庭（1787-1854）の門に入り、蘭方医術を修め、郷里（紀州荒川）に帰って開業した。新宮門に入ったのは、1827、8年頃、25-30歳前後であったとおもわれる。

俊茂には四男三女があり、棟庵はその末子（俊茂 40 歳の子）である。長男・文卿（1822-1875）、三男・管吾正夫（1836-?）とも蘭方医であり、管吾正夫は松山家第十二代を継いだ。文卿は 27 歳のおり、京都に出て父・俊茂と同じ新宮塾（当時は順正書院といった）に入って蘭方医学を学んだ。新宮塾ではその才能、人格を愛されて新宮家の婿（第二分家）となり、新宮凉介と改めた。

この新宮凉介には三男四女があり、長男は新宮凉園（1852-1925）と称して父のあとを継ぎ、次男・誠二（1859-1943）は叔父・松山管吾正夫の嗣となって松山家第十三代を継いだ。この新宮凉園と松山誠二は二人とも後述するように叔父・棟庵をたすけ、成医会ならびに成医会講習所のために大いに貢献した。

棟庵は、父・俊茂の医業のもっとも隆盛のときの子であったから、幸福な境遇に成育したといえるであろう。それに父、兄はじめ親族の多くが医業に携わっていたから、はじめから医人として育つよう運命づけられていたようなものであった。

当時、医師は数少ない知識階級であり、とくに松山家は苗字帯刀を許された豪族でもあったから、棟庵は少年時代から基礎学修業に事欠くことはなかった。彼自身「幼少より家庭にありて父母より薰陶をうく」と回想する通りである。当時彼がうけた教育はいうまでもなく儒教的なもので、15 歳ころまでに四書五教を十分読み終えていた。この漢学の素養は、後に詩作（漢詩）に耽るときの素養にもなったし、また江戸に出てはげしく医療活動するときの倫理の基本にもなった。

明治維新は数少ない下級士族によって遂行されたものであったが、これに続く自由民権運動もやはり数少ない豪族（郷土、庄屋、大百姓ら）によっておこなわれたものであった。棟庵の生家はいわばこの後者の階級に属するものであり、彼らは士族に準ずる階級でありながら、士族より経済力があり、さらには士族と同様、代々本を読んだ階級であった。そのうえ村落の管理者としての農村の実情にあかるく、農民を代表するという地生えの意識の強い階層でもあった。

棟庵が後にしめす（多少の特権意識をもちながらも）庶民は指導してやらねばならぬといった気概や、また名誉欲・権力欲にはこれを押しつぶして近づくかないといった思想は、幼少より学んだ儒教精神と、このような生活環境を背景とした武士道的精神からきているようにおもわれる。

蘭学修養——新宮涼庭塾・順正書院——

棟庵が生まれた頃は蘭学塾の勃興期にあった。1838（天保9）年には、緒方洪庵（1810-1863）が大阪の瓦町に適塾をひらき、江戸では佐藤泰然（1804-1872）が薬研堀に和田塾を開いている。いずれも幕末から明治にかけて活躍した多くの英才を育てたことで有名である。

緒方洪庵、佐藤泰然はともに長崎で蘭館医ニーマン（J.F. Nieman）に医学を学んだ蘭方医である。佐藤泰然は1843（天保14）年に下総の佐倉にうつり、順天堂を創設して西洋医学の実施と医育につとめた。現在の東京お茶の水の順天堂はそれのつづいたものである。

緒方洪庵は医学の教育だけでなく、他の洋学をも教えて多くの有為の人材を養成した。長与専斎、池田謙斎、田代基徳、緒方維準、山口良蔵らの医者の他に橋本左内、福沢諭吉、大村益次郎（村田蔵六）、大島圭介らの明治維新をリードした人物も多いのである。緒方は1862（文久2）年、幕府によばれて江戸の奥医師となり、さらに西洋医学所（東大医学部の前身）の頭取をも兼ねたが、多忙のためかその翌年血吐して急逝した。

佐倉の順天堂では佐藤尚中が佐藤泰然の弟子となって大いに頭角をあらわし、さらに長崎に留学してポンペ（J.L.C. Pompe van Meerdervoort. 1829-1908）に師事した。佐倉に帰ってからは順天堂の医育を大いに刷新した。泰然の実子・松本良順も長崎でポンペに学び、江戸に帰って緒方のあとをついで西洋医学所の頭取になった。

京都では、1839（天保10）年、新宮涼庭（1787-1854）が南禅寺畔に前述の新宮塾・順正書院を開いた。新宮涼庭は丹後の人で、長崎におもむきオランダ人や通詞について蘭方医学を学び、商館長ズーフ（H. Doeff）の信用をえて蘭館の医師になった。1818（文政元）年に京都の室町に開業し、そこで

多くの門生を教育しつつ、さらに1839年に私財(1万両)を投じて順正書院をひらいた。新宮涼介、松山棟庵の兄弟が学んだのはこの順正書院である。

棟庵は15歳のとき(1854(安政元)年)、順正書院にはいったが、残念ながら入門の前年に新宮涼庭はすでに没しており、その頃は養子・新宮涼民が塾生(35,6名)を指導していた。教科目としては生象(解剖)、生理、病理、外科、内科、博物、舎密(化学)、薬性の8科目があり、修業期間は2年ないし3年であった。クリニックもあり、代診を1年もやれば門戸が張れるという順序になっていた。

棟庵が順正書院にいたのは6年ばかり(1854-9)であったが、入門2,3年後にはもう「年令弱冠にして新宮涼民の塾長に挙げられ、塾生の薫陶に従事し、専ら代診を担当……」(懐旧録)とあるように、わずか17,8歳で塾長に挙げられ、塾生の指導、代診に従事していたらしい。その並々ならぬ偉才ぶりがうかがわれるのである。塾長、代診を担当していた頃は1日5,60軒も回診し、深夜4時ころ帰路につくこともしばしばであったという。

棟庵が後にしめす多くの人を集めて一つの組織にまとめてゆく能力は、この塾長時代にきたえられたように思われる。そして代診生活で気づいたことは当時の医者(とくに多くの漢方医)があまりにも近代医学に無知であることであった。今後は解剖や生理学や病理論に基づいた西洋医学をもっと深く学び、それを以てこれらの人々を啓蒙せねばならないと考えた。

順正書院の現在 順正書院の建物は、今も松山棟庵が学んでいた頃と同じ南禅寺畔に、湯豆腐料亭「順正」としてそのまま残っている。その「講書の間」つまり講堂には広い床の間と、一段高い師匠の坐が設けられており、それらは昔の講義のありさまを示すものとしてまことに興味ぶかい(写真1)。

ただその頃の蔵書は移管ないし四散して、現在ほとんど見るべきものがないといわれる。

(余談になるが)筆者が「順正」を訪れたときは(1993年)、受け付けの老人が、この順正と松山棟庵や慈恵医大との関係を知って

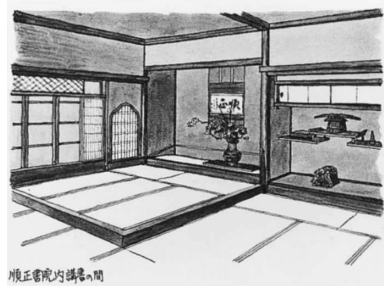


写真 1. 松山棟庵が学んだ順正書院

順正書院の建物は現在湯豆腐料亭「順正」としてもとの南禅寺畔に残っている。左の絵は玄関、右は講堂。両者とも料亭としては使われず昔のまま保存されている（Medical News No. 301 より）。

おり、パンフレットをもってきて説明してくれた。慈恵の関係者はぜひ一度訪ねてみてはどうだろうか。

郷里紀州での精神修養

棟庵は 20 歳のとき（1859（安政 6）年）、医学修養を一旦うちきり、飄然と紀州に帰郷した。その頃、京都では尊王攘夷運動が喧しく、諸藩士が続々あつまって物情騒然となり、蘭学修養どころではなくなったためといわれる。

それから 7 年間、つまり 1866（慶応 2）年に江戸にでるまで、棟庵は郷里紀州にあって、読書に耽り、詩作を続け、精神修養に努めた（もっともこの 7 年間全部が悠々自適、精神涵養というわけではなく、一度は湯浅村の豪族・網清一族に懇請されて湯浅村で開業したり、また和歌山で開業していた義兄（上田春庭）の急逝のため代診をしたりして、2 年ばかりを費やしている）。

そして棟庵は 1866（慶応 2）年、とつじょ江戸にむかって旅立った。小伝には、彼の向上心が一草医として埋もれることを許さなかったためと書かれ

ている。

しかし筆者には、この京都からの帰郷と、それに続く晴耕雨読生活、さらに江戸への突然の旅立ち、といった一連の行為は、どうも受動的で棟庵らしくないように思われる。京都が危険であるのなら、どうしてその頃いよいよ事件の多くなりつつあった江戸に向かうのであろうか、江戸、横浜では、安政の大獄（1859）、桜田門外の変（1860）、東禅寺事件（1861）、坂下門外の変（1862）、生麦事件（1862）などが矢継ぎ早に起きていたのである（手塚律蔵（高木兼寛の岳父）襲撃事件（1862）もそのころである）。

筆者はむしろ次のように考えてみたい。棟庵はまず自分の医学に不安を感じていたのではないだろうか。新宮塾では、新宮凉庭が長崎で学んだ医学を二代目の教師ら（凉民、凉閣、凉介ら）が守っていただけで、新しい医学を学ぶこともなく、そこでの医学はすでに古くなっていてのではないだろうか。ヨーロッパでは新しい医学がオランダのみならず英国、フランス、ドイツなどで次々と勃興しつつあった。棟庵は京都を去り、いったん郷里紀州にこもり、そこでこれからの新しい西洋医学を学ぶためにはどうしたらよいかを、世界の情勢をみながら、じっくり考えることにしたのではなかろうか。そのように考えないと、江戸に旅立ってから後の棟庵のあの激しい教育、医療に対する改革運動がどうしても理解し難いのである。おそらく彼は、読書、詩作といった「自分だけの世界」に入りながら、激しく変動する社会に対応し続けていたものと考えられる。

長崎では、前述のオランダ海軍二等軍医ポンペが幕府の要請によって来朝し（1857（安政4）年）、幕末の日本医学に大きい影響を与えていた。ポンペの教育をうけた者は幕府や諸藩から派遣されたものであるが、ポンペが帰国する1862（文久2）年までの5年間に130余人にも達した。その中には松本良順、緒方惟準、戸塚文海、池田謙斎、佐藤尚中、佐々木東洋、岩佐純、長与専斎、橋本綱常、伊東玄伯ら、その後の日本医界を大きくリードした人びとがいる。ポンペの教え子たちは全国に散らばって、各地で新しい西洋医学を実践していったが、その様子は棟庵の耳にも詳しく達していたであろう。

帰国したポンペのあとをついで、長崎で医学を教えたのはボードイン (A.F. Bauduin) であった。オランダ陸軍の一等軍医で、早くから日本人のあいだに名声が高まり、多くの患者が長崎につめかけていた。棟庵はこのボードインに師事してみたいと思ったらしい。

江戸でも、西洋医学にたいする熱意がようやくたかまっていた。伊東玄朴らは、漢方医たちの圧迫を排除して、神田お玉ヶ池に（蘭方医 82 人の拠金によって）私設の種痘所を設けて種痘を行うと同時に、西洋医学を志す者の勉学の場所とした。1861（文久元）年、種痘所は西洋医学所と改称して、教授、解剖、種痘の三科をおくことになった。そして大阪から緒方洪庵がよばれてこの西洋医学所頭取（校長）となり、ポンペに学んだ松本良順が長崎からかえって頭取助（副校長）になった。間もなく緒方が急逝したため松本はその後任となって、ポンペのやり方に準じて学制を改革した。教授 5 名、助教授 4 名で授業し、学生数は 70 名前後であった。この医学所は維新後、医学校兼病院と改称し（1869）、そして後の東京大学の主たる源流（医学部）になった。

一方、緒方洪庵の適塾に学んだ福沢諭吉（1834-1901）は、江戸の鉄砲州中津藩邸内に蘭学塾を開き（1858（安政 5）年）、蘭学を通じて西洋文化を注ぎこんでいた。しかしここは間もなく英学塾に変わることになった。それは福沢が横浜で外国人と会話をしたところオランダ語が全く役にたたないことが分かったからであった（この英語塾への変更は一見軽率にみえるが、今日英語がすべての領域で国際語として機能しているのをみると、むしろ福沢の直感力と判断力に敬服すべきであろう）。この英語塾は 1868（慶応 4）年に慶応義塾と名のり、鉄砲州から新銭座に転居し、さらに 1871（明治 4）年には新銭座から現在の三田に転居した。

幕府も、西洋の学問一般を教授する学校「蕃書調所」を江戸に開き、全国から一流の学者をあつめた。当時は西洋文化が江戸へ集中する傾向があったため、洋学者もおのずと江戸に集まっていたが、この政策によって一層拍車がかかり、全国から目ぼしい学者のほとんどがこの蕃書調所に集まることになった（明治維新の 1868 年までの 10 年間に 50 人ちかくの学者が集まった）。そ

こでの教育には蘭、英、仏、独、露の外国語のほかに自然科学、兵学などがあった。ここは1863（文久3）年に開成所に、1868（明治元）年に開成学校と改称され、それは東京大学のもう一つの源流（法、文、理）になった。

棟庵は郷里紀州で、わが国におけるこのような慌ただしい西洋医学の動きをじっと眺めていたに違いない。そして1866（慶応2）年秋、棟庵は、ボードインが横浜に滞在していることを偶然知った。時節到来である、さっそく新造の紀州藩船・明光丸に乗り込んで横浜に向かった。27歳であった。幸いというべきか船中には知人・山口良蔵がおり、いろいろ新しい情報を得ることができた。山口は適塾の出身で、塾長までした人物であるが、その頃は紀州藩にやとわれていたのである。彼は適塾の先輩・福沢諭吉とは旧知の仲で、江戸に出るたびに福沢宅を訪れていた。

ところが棟庵が横浜に着いてみると運の悪いことに目的のボードインはすでに帰国していた。門人の医学生をオランダに留学させるためと、江戸に海軍軍医学校をつくる準備のために一時帰国したのであった（この軍医学校の計画は戊辰戦争のため実現されなかった）。

棟庵はやむなく、当時横浜に転居していた佐藤泰然を訪ね、蘭医マイエル、仏医ムリエらを紹介してもらい、しばらく医術を見学することにした。

英学修養——福沢諭吉塾・慶応義塾——

目標の一つを失った棟庵は、江戸に出て先の山口良蔵の意見をもとめた。山口は福沢諭吉の人物、学識などを賞賛したのち、現段階では福沢塾にひとまず入門するのが最上の策であろうと述べた。棟庵はまだ入門の決心がつかぬまま、とにかく鉄砲州の福沢宅を訪ねてみた。福沢が云うには「君はすでに蘭学を習熟しているのだから、英文を読むことは雑作のないことだ。俺は近く米国に行くことになっているが、そのとき英文の医書を多数求めてくるつもりである、君はその方向に向かって道を拓いてみてはどうか」ということであった。棟庵はこのことを聞いて断然意を決し、27歳の学生として福沢塾に入門し、英学の初歩から勉強しなおすことにした（1866（慶応2）年暮）。福沢自身蘭学を修業したのち、英学の時代がくることを洞察してこれ

を独習し、遂に英語の諸書を翻訳したぐらいであるから、棟庵に対する言葉もけっして我田引水ではなかったのであろう。

この福沢塾入門については、横浜での佐藤泰然との面会も一つの動機になったのかもしれない。佐藤も当時、米医ヘボン、シモンズ、蘭医マイエル、仏医ムリエ等と親交があり、「英語は世界に共通する言葉であり、またフランス医学も優れているから英語、フランス語の勉強は必要である」と強調していたからである。

さてその福沢塾であるが、この塾は中津藩邸の五軒続きの長屋一棟であった。一番奥の一軒が福沢の居室であり、その次の一軒が塾舎（講堂）として使われ、残りの三軒が生徒の寄宿舎で、ここが寝室にも勉強室にもなっていた。食堂というのは小さい板の間で多くは立ちながら飲食していたという。坪数その他から考えて塾生はせいぜい20-30人程度ではなかったかと推測される。

この塾は入学金を払うにもかかわらず決まった教師というものがおらず、入学した者同士、つまり学生同士が教え合うというのがその教授法であった。少し進んだ者が下の級のものを教える、最初の者が第二の者を教え、第二の者が第三の者を教えるという仕方で、下までずっと順次にそうして行くのである。

棟庵はそうゆう中でどのように勉強していたのかはよく分からないが、当時は英語の書物は相当そろっていたらしいから、自分で自学自習的に勉強していったのではないだろうか。とにかくこのような勉強法にもかかわらず棟庵の英学の進歩は驚くべきものがあつたらしい。

1868（慶応4、明治元）年4月、福沢は塾を鉄砲州から芝新銭座に移し、名を慶応義塾と改めて教育内容を充実したが、そのころ棟庵はすでに教師として生徒を教導していた。当時の日課受持表が残っているが（表1）、それによると棟庵はコーミングの人体生理学書（表では コマニング氏 人身窮理書）をつかって講義している。入塾してからわずか1年余でもう英語の教科書をつかって生理学の講義をしているのである。福沢も棟庵の進歩には驚いたらしく、山口良蔵に送った手紙に「松山（棟庵）の上達は格別なり、小泉

表 1. 慶応義塾の日課表（慶応四年版）

| 教 科 目 | 時 間 | 受 持 |
|-----------------------|--------------------------|-----------------------|
| エーランド氏 経済書講義 | 火、木、土の朝 10 時より | 福沢 諭吉 |
| クアッケンボス氏 合衆国歴史講義 | 月、水、金の朝 10 時より | 小幡篤次郎 |
| クアッケンボス氏 窮理書講義 | 月、木の午後 1 時より 4 時 | 村上辰次郎 |
| バルレイ氏 コモンズスクール 万国歴史会読 | 火、金の午後 1 時より 4 時 | 小幡甚三郎 |
| クアッケンボス氏 窮理書会読 | 水、土の午後 1 時より 4 時 | 永島貞次郎 |
| <u>コラミング氏 人身窮理書会読</u> | <u>月、木の午後 1 時より 4 時</u> | <u>松山 棟庵</u> |
| コルネル氏 ハイスクール 地理書素読 | 日の他毎日朝 9 時より 10 時 | 小幡篤次郎 |
| ベイトルバルレイ氏 万国歴史素読 | 日の他毎日朝 9 時より 10 時 | 永島貞次郎 |
| スミス氏 窮理初歩 | 日の他毎日朝 9 時より 10 時 | 村上辰次郎 |
| <u>文典素読</u> | <u>日の他毎日朝 9 時より 10 時</u> | <u>松山 棟庵</u> 小泉 信吉 |

下線を付したところは松山棟庵の担当



写真 2. 福沢塾・慶応義塾時代の松山棟庵（右）と小幡篤次郎

松山棟庵の帯刀姿は珍しい。小幡篤次郎は後に慶応義塾の塾長になった。

（信吉）も頼もしき品物。一兩年のうちに
は一人物たること請合なり」と書いている。
写真 2 はその頃、棟庵が小幡篤次郎と
一緒に撮ったものである（小幡はのち
1890（明治 23）年に慶応義塾塾長になっ
た）。

福沢は予定通り 1867（慶応 3）年 1 月に
遣米使節一行に加わって渡米し、同年 6 月
に多くの英語の医学書を購入して帰国し
た。棟庵はそれらを次々と読破し、その中
のフリント（Flint）氏の内科書，熱病編
を翻訳して公刊した。「奎扶斯新論 明治
元年 岡田屋喜七発行）（120 頁）がそれ
である。わが国における初めての英医書翻
訳出版であった（以後、棟庵は「地学事

始」(1870),「傑氏萬方史略」(1874),「初学人身窮理」(1876)など次々と訳書を刊行している)。棟庵が蘭学の出であるから英学を学ぶにも速かったことは理解できるが、それにしても入塾後わずか1年余で英医書を翻訳して出版したというのはやはり驚異であろう。

その頃の塾生で後年名を成した人物には(筆者の勝手な選択であるが)、小幡篤次郎(慶応義塾塾長)、小泉信吉(同塾長)、渡辺洪基(東京大学総長)、馬場辰緒(自由民権家)、松山棟庵(医師)、豊住秀堅(医師)、安藤正胤(医師)、早矢止有的(医師、丸善の創設者)らがいる。棟庵が教師として慶応義塾にいたのは6ヶ月ばかりであった。

棟庵らは戊辰戦争の砲声のなかで講義 1868(慶応4)年5月15日(土曜)の戊辰戦争の最中、上野の山にたてこもる彰義隊を攻める官軍の砲声がごうごうと響きわたっていた。慶応義塾ではその日も表1の時間割にしたがって講義がすすめられていた(棟庵もその教師の一人であった)。福沢は騒然として落ちつかない塾生に向かってこう訓戒したと云われる。「この慶応義塾は、日本にいかなる騒動があっても未だかつて洋学の命脈を断やしたことはない。この塾があらん限り大日本は世界の文明国である。世間に頓着するな」と。

棟庵のクールな合理主義 同じ1868年にこんな出来事もあった。(棟庵の回想録)「ある日、芝宇田川町あたりで、どこかの侍がバタバタ駆けてきて、犬を殺して胆をとろうとしたが胆の在りかが分からないという。では取ってやろうかという、どうか頼むという。胆を取ってやると侍は大変喜んだ(胆は薬として用いたのであろう一筆者)。そこで犬の死体をもらって帰ってくると、先生(福沢のこと一筆者)がこれを見て、そんなものを持ってくる奴があるかと、大声で叱られた。私は解剖するつもりで持ってきましたというと、そんな血の垂れるものを持つてくるとはまったく怪しからんことだ、と一層怒鳴りつけられた。先生は血を見るのが大嫌いなものだから、血の垂れる犬を見て吃驚したのだろうが、私などはべつに何とも思わなかった。犬などは解剖して随分料理して食ったものだ」。

2. 日本医学の近代化の試み

—— 創造と挫折 ——

棟庵は、1868（明治元）年10月、慶応義塾時代の親友・早矢仕有次のすすめで義塾を辞し、横浜に出た。彼はここで蘭医マイエル（De Myer）、米医ヘボン（J.C. Hepburn）について実地医学を研修し、義塾で学んだ英学、医学の力を実地に活用してたしかめた。

横浜では、早矢仕が医業のかたわら実業に進む方針でその準備中であった（義塾時代、英語は棟庵の方が勝り、医学は早矢仕の方が優れていると云われた）。早矢仕は横浜梅毒病院の院長として、また境町で診療所（静々舎）を開きながら、一方で書籍、洋書、医療器械、薬品などを販売する丸屋商社（後の丸善株式会社）を開いた。彼には商才というか一種のひらめきがあり、当時はまだ小資本をあつめて作る株式会社というものがなかったが、丸屋は日本でもっとも早い時期の近代的株式会社であった。そのころ棟庵と早矢仕はもう一人の友人・箕作秋坪と一緒に横浜新浜町の早矢仕の家で自炊生活をしていたが、1年ちかい自炊生活ののち棟庵は紀州藩士の娘・内田信子と結婚して独立した。

横浜共立病院 —— 日本最初の有志共立病院 ——

1868（慶応4、明治元）年4月、戊辰戦争のとき横浜に外科を主とする軍陣病院がつくられ、そこでは英医ウィリス（W. Willis）が活躍していた。ところが同病院は7月に東京に移り、横浜には分院が残されたが、それも1年ばかりで閉鎖されてしまった。病院の恩恵を経験した住民は新しい病院の建設を熱望した。先見の明、経営の才がある早矢仕はこれを見逃すはずはなく、この熱望に応じて有志から基金（三井八郎右衛門ら横浜在住の慈善家20余人から6千円）を集めて、北仲通六丁目に仮病院（横浜病院）を開設した（1871（明治4）年8月）。これは有志からの資金で株式組織的に共同経営する新しい形式の病院であった。松山棟庵は医官総拾という名義で病院建

設に参加した。おそらく早矢仕からの懇請によったものであろう。診療医として（また教師として）この病院にもっとも貢献したのは米医シモンズ (D.B. Simmons) であった（余談ではあるが、シモンズはまた福沢の腸チフスを診療したとき（1870 年）からの福沢の主治医であった）。

その後この病院は名称を中病院、共立病院、十全病院などと改めながら現在の横浜市立大学医学部に発展する。

棟庵はしかしこの病院の診療、運営にたいしてはあまり寄与することができなかった。当時、彼は東大医学部（大学東校）の大助教に任命されており（1871 年 1 月）、しかも内紛のためにその任に落ち着けなかったためであった。はじめこの大学は上記ウィリスを長として英国医学を教授することになっていたが、それが急遽ドイツ医学の制度に改められたのである（止むなくウィリスはこの大学を去り、鹿児島医学校の校長に就任した）。棟庵にとってもこの変更は腹立たしいことであり、断然辞職した（1871 年 11 月）。

福沢が“町人論吉”を標榜したように、棟庵は“町人医”をもって終始しようとしていたが、権威主義的なドイツ医学の支配下に入ることは我慢ができなかったであろう。それ以後日本はドイツ医学一辺倒の時代に入っていた。

慶応義塾医学所 —— 日本最初の私立医学校 ——

1871（明治 4）年 8 月、東大医学部はドイツ人教師として陸軍軍医少佐ミュルレル (L. Mueller) と海軍軍医大尉ホフマン (T.E. Hoffmann) を招聘した。以後この医学部はドイツの軍医学校に似せた制度によって「官吏」「学者」の養成に専念していった。

一方、福沢論吉は若い頃の外遊の経験や戊辰戦争でのウィリスの活躍、シモンズとの交遊などから、日本においては実学的な英国医学が主流をなすべきであると考えていた。従って明治政府が行っている医制を権威主義的なドイツ医学に統一することには強く反対であった。棟庵もまた東大医学部を中心にすすみつつあるドイツ医学一辺倒に対しては強い反対意見をもち、むしろ実学的な英国医学の隆盛を期待していた（ここにいう実学とは職人的な実



写真3. 尊生舎診療所

1875（明治8）年に松山棟庵によってつくられ、慶応義塾医学所の実習場にする予定であったが、あまり利用されなかった。この尊生舎は医学所が廃校になった後は、尊生医院、松山病院として継続した。

学ではなく、福沢がたえず強調していた論理をもった実学のことであった）。

明治4、5年頃、ある塾生が「医者になりたいのでドイツ語が勉強できる学校に移りたい」と福沢のところに云ってきた。福沢はこれにこたえて、「医者になるならドイツ語でなく英語でやれ。この塾出身の松山棟庵と相談して医学所をつくってやる」といって、さっそく棟庵に相談した

らしい。棟庵もちろん大賛成で、話は簡単にまとまったという。福沢、棟庵の医学所創立の望みは時間をかけてゆっくり発酵していたのであろうが、その決断はこのように意外に無造作なものであったらしい。福沢は自ら三千円を投じて校舎、書籍、器機を揃えた。

こうして「東大がドイツ語でやるなら、こっちは世界の共通語・英語でやる」という意気込みで、英語による慶応義塾医学所が開設された（1873（明治6）年10月）。そして棟庵はこの医学所の校長として、本塾（慶応義塾）とは別個に、会計から校則、教育課程まですべて自由裁量にまかされた。あたかも棟庵の私塾の観があったといわれる。彼はさっそく早矢仕有的のやり方で、有志共立の思想で計画、実行していった。まず医学所であるからには附属病院も作らねばならず、これには大分苦勞したらしい。医学所開設の翌々年、三田二丁目に診療所・尊生舎を作り（写真3）、静岡から友人・杉田玄端を呼んで主任とし、そこを医学所の実地訓練の場とした（1875）（後述のように医学所は1880（明治13）年に廃校になるが、尊生舎はその後も尊生医院として（1893）、さらに増築して（1906）松山病院として生き残った。またその前1887年には芝田村町に尊生舎分院も開院している）。

医学所の教員は棟庵をはじめ新宮涼園（棟庵の甥）、杉田玄端、杉田武（玄端の息）、松山誠二（棟庵の甥、当医学所卒業生）らであった。教育期間は2年で、予科と本科に分かれており、講義はハーツホン（H. Harthorne. ペンシルバニア大学教授）の著書を主体に英米系医書によっておこなわれた。予科、本科の教科書は次のようであった。予科：クワッケンボス、ガノット・理学、ウェルス、コーマン・化学、本科：

ハーツホン、グレー・解剖学、ハーツホン、ダルトン・生理学、ハーツホン・病理学、ハーツホン、ネルゲン・薬理学、ハーツホン、タンナー・内科学、ハーツホン、ドロイツ・外科学。これらの著書はもちろんすべて早矢仕の丸屋商社を通じて揃えられた。

当時のカリキュラム（表2）が残っているが、それをみると学習の方法はそれまでの新宮塾（順正書院）、適塾、福沢塾（慶応義塾）などの共通のやりかた（暗誦と読解）を踏襲したらしく、率直にいつて当時としてもあまり新しいようには思えない。棟庵の経歴からみて止むをえなかったのであろうか。

入学者は1873（明治6）年の創立時には16名であったが、翌年からは漸次増え、とくに1876年の医術開業試験布達のころはピークに達した。しかしどうした訳か翌1877年を境に漸次減少しはじめ、開設7年後、1880（明治13）年にはついに廃校せざるをえなくなった。生徒数は1879年までで延300名であった。

表2. 慶応義塾医学所の日課表

| 時期 | 教科目 |
|------|--|
| 予科三番 | 素読（稽古三時間） 単語編 理学初歩 文典 |
| 予科二番 | 素読 講義（稽古三時間） 化学初歩 博物学 翻訳医書 |
| 予科一番 | 講義 暗唱（稽古三時間） 化学 理学 翻訳医書 算学初歩 |
| 五等本科 | 講義 暗唱（稽古三時間） 解剖学 健全学 生理学 実際算学 |
| 四等本科 | 講義 暗唱（稽古三時間） 病理学 薬物学 代数学 |
| 三等本科 | 講義 暗唱（稽古三時間） 内科学 外科学 産科学 衛生学 |
| 二等本科 | 講義（稽古三時間） 察病学（診断学） 内科学 臨床医学 医時筆記 |
| 一等本科 | 講義（稽古三時間） 裁判医学 精神生理 医史 |

このような結果になるにはいろいろ原因があったと考えられるが、全体としては西南戦争による経済不況のため慶応義塾の存在そのものが深刻な状態になったということであろう。義塾を維持するためには一時期のスリム化が必要であり、その目的のためには医学所を廃校にせざるをえなかったのである。医学所自身の問題としても、医学教育のために金がかかりすぎるがあった。顕微鏡をはじめ多くの機器をそろえねばならず、また入院設備をもった病院も建築せねばならない、いずれも莫大な資金を必要とするのである。また教員の確保が大変であった、次々と開業していく者が多く、代わりの教員をさがすのが容易でなかった。英米医学を教授できる医師の数はきわめて少なかったからである。もう一つ、学生側の問題として医術開業試験の試験委員がドイツ医学系が多く、ドイツ医学系の学校（たとえば済生学舎）で教わった方が受験に有利だという考えが浸透していったこともあったらしい。

こうして明治のはじめに先頭をきって設立された私立医学校・慶応義塾医学所もわずか7年で廃校の止むなきにいたった。廃校後、学業なかばの者はおそらく他の医学校に転入していったものと考えられる。

しかし不思議なことに、この慶応義塾医学所設立の思想は廃校の翌年(1881)、棟庵たちの努力によって成医会、成医会講習所、有志共立東京病院（つまり慈恵医大）の設立の思想として再び生き返ることになるのである（後述）。

東京共立病院

棟庵は1878（明治11）年10月、隈川宗悦（シモンズの弟子）らとはかって麴町有楽町三丁目に東京共立病院を興した。その診療時間と医師は次のようであった。

| | |
|----------------|----------------|
| 毎日午前8時から10時まで | 新宮涼園、宮川省軒 |
| 毎日午後2時から4時まで | 松山棟庵、隈川宗悦、安藤正胤 |
| 毎土曜日午前 | 杉田玄端 |
| 毎水曜日、土曜日午後3時から | シモンズ |

この病院の設立の旨意は明らかでないが、営利というよりは知人同士の援助ということがあったらしい。かつて横浜で懇意になったシモンズを聘し、シモンズの東京進出に力を貸したとも考えられる。また杉田玄端は慶応義塾医学所の診療所（尊生舎）の主任であったが、そこも悲境にあったためさらにこれを援助せんとしたのではなかろうか（つまりアルバイト）。新宮涼園についても同様である。

この東京共立病院は1879（明治12）年4月限りで閉院した。おそらく医師それぞれが別の業務をもち、遠距離からの通勤では、交通機関の不備な当時としては長続きしなかったのではなかろうか。そうでなければ「共立」ということが尚早であったのだろうか。

東京医学会社と東京開業医師会——日本最初の医学会と医師会——

棟庵は、1875（明治8）年、松本良順らとともに、わが国最初の医学会ともいうべき「東京医学会社」を結成した（“会社”といっても今日の株式会社とは異なり、むしろ“クラブ”といった意味合いであったらしい）。そしてその翌々（明治10）年には、今度は開業医の団結を目的とした「東京開業医師会」を創設した。この両者は、わが国医学史上特筆すべきもので、それぞれ今日の医学会と医師会に対応するものであった。その発想は、両者相携えて医学の革新を目指そうとしたことにあった。

当時わが国の医師の社会的地位は必ずしも高いものではなかった。多くの医師は（長尾折三が多くの著書で語っているように）己の天職が人命の擁護にあることを忘れ、医師としての権利、義務を放棄し、一部にはあたかも幫間のごとく見做される者さえあった（多くは漢方医であった）。

明治10（1877）年ころまでは、まだ漢方医の方が圧倒的に多く、洋方医には革新の覇気はあってもまだ医界を統一する力はなかった（当時の医師の総数28,289人中、漢方医23,015人、洋方医5,274人であった）。しかし維新いらい西洋医学が急激に移入されるにおよんで、洋方医の有力者たちははじめて革新の烽火をあげることができたのである。それが東京医学会社と東京開業医師会であった。

まず東京医学会社であるが、これは松山棟庵が松本良順、戸塚文海、長与専斎、緒方惟準、石黒忠恵、橋本綱常、三宅 秀、田代基徳ら（在官）、佐藤尚中、足立 寛、杉田玄端、早矢仕有的、隈川宗悦、長谷川泰ら（在野）に語らって、日本橋区檜物町（現・中央区八重州二一三丁目）の交銀私局において結成したものであった（1875（明治8）年4月11日）。交銀私局というのは早矢仕有的がその前年に創設した小規模な私立銀行のことで、会員でもあった早矢仕がその建物の一部を医学会社のために提供したのであった。

医学会社には会長というものを置かず、その運営は6人の幹事つまり松山棟庵、隈川宗悦、安藤正胤、石黒忠恵、三宅 秀、田代基徳らによって事務的に行なわれた。社員を募り（会員を社員とって、当初は50名程度であったが漸次増加した）、毎月一回集会を催して医学、医政を討論、研究し、西欧の医事新聞に模した機関誌「医学雑誌」（編集長・三宅秀）を発行した。要するにこの医学会社というのは医学会と医師会を併合したようなものであった。

1876（明治9）年、医学会社は京橋区鎗屋町十一番地（現・中央区銀座四丁目四ノ一）に引っ越したが、その翌年ころから次第に学術に興味をもつ会員と医政に関心を抱く会員とが分離しはじめ、会合も不定となり、その前途は悲しむべき状態にたち至った。しかし洋方開業医らはやっと成立したこの組織を何とか持続したいと望んだので、松山棟庵はその要望に応じて1877（明治10）年、隈川宗悦、安藤正胤、高松凌雲、牧山修卿らと協議し、東京府知事に建議して東京開業医師会なるものを設立した（東京医師会の前身。会員1,500余名）。

一方、漢方医界の方では漢方医の医療行為を国家に認定させ、それを存続させるために漢方医会を結成し、議会闘争を展開する勢いになっていた。洋方医としてはこの運動に対抗するため一層強い組織をつくる必要がでてきたので、池田謙斎、長与専斎、長谷川泰、石黒忠恵、戸塚文海を発起人として、最長老・松本良順を会長として、新たに「東京医会」を結成した（1885（明治18）年。そして先に自然消滅した東京医学会社の残り資産はこの東京医会に寄付された）。また1893（明治26）年には東京医会の上部団体として

の「大日本医会」が結成され、理事長に高木兼寛が、理事に長与専斎、高松凌雲、長谷川泰、佐藤 進、鈴木万次郎ら5名が選ばれた（最盛時には全国で会員3,000名に達したといわれる）。

松山棟庵がこれまで最も力を注いだのは医育機関としての慶応義塾医学所と医師相互の研究団体としての東京医学会社であった。しかるに慶応義塾医学所は本塾の存亡問題ともからまって廃校の運命となり（1880（明治13）年6月）、また東京医学会社もほぼ時を同じくして自然消滅しつつあった（医学会社の建物の売却は1882年）。創設熱の強い棟庵はしかしこのような状態に拱手傍観しているわけにはいかなかった。その頃彼は新しい学会、つまり医政とは無関係の、しかも範囲を英米医学に限定した新たな研究会を起こす計画をたてていた。

3. 成医会の設立とその隆盛 —— 有志共立、総合化の成功 ——

高木兼寛（1849-1920）が5年間の英国留学を終えて帰国したのは、ちょうど棟庵がそのような計画をたてていた頃であった（高木の帰国は正確には1880（明治13）年11月20日）。

高木は留学前に、鹿児島で英医ウィリス（W. Willis）に、さらに東京の海軍病院、海軍軍医学校（海軍軍医学舎）で英医アンダーソン（W. Anderson. 1842-1900）に師事していたが、こんどは英国のセント・トーマス病院医学校で本場の医学を学んできたのである（その医学校はアンダーソンの母校でもあった）。彼はそこできわめて優秀な成績を収め、数々の優秀賞、名誉賞を受賞して卒業した。そして在学中からいつか日本にもこのような立派な病院（人間愛にもとづく庶民のための病院）とそれに付属する医学校をつくってみたいと考えていた。

高木が帰国して痛切に感じたことは、医学界の風潮がすっかりドイツ的医風に変わっていることであった。庶民の医療より医学研究を至上とする風潮

がすっかり支配的になっていた。高木は、英国で学んだ庶民の医療、患者中心の医療を至上とする風潮を広め、早くそれを現実にもせねばならないと考えた。そのころ目立つことは、順天堂のような名医による立派な病院は設立されても、貧しい庶民のための病院はつくられないことであった。

ただ留学の前後で好ましい変化もないわけではなかった。それは、アンダーソンによって教育された若い海軍軍医が15名も育てていたことであった。アンダーソンは明治政府の要請で海軍軍医学校の教師として来日した英医であったが、明治6年10月から同13年1月までの6年間で、これだけの人材を養成したのである（高木も留学前に2年ほど師事したことがあった（前述））。これらの若い軍医たちは、今度は高木の部下として各方面で協力することになった。高木は帰国と同時に海軍中医監（少佐相当）、海軍病院長に任ぜられた。

松山棟庵が高木を訪ねたのは高木が帰国したその年の暮れであった（高木の上司・戸塚文海が東京医学会社の会員であった関係で棟庵を高木に紹介したらしい）。彼ら二人は、いま日本に広がっている人間疎外の医療をもっと人間味のある暖かい医療に、病人の悩みに応える医療に変革すべきではないか、ということで完全に意見が一致した。そしてこの現状を変革するためには、まず強力な研究団体をつくりその団体を中核にして英国系医学を基調にした医学施設（医学校、病院など）を創っていくべきではないか、という結論に達した。

棟庵はその話し合いのなかで、それまでの彼の数々の失敗のなかで得られた貴重な経験や教訓についても高木にアドバイスすることができた。その一つは、ある団体、組織をつくるときは、その目的をしっかりと理解した人間だけで結成すること、つまり少数精鋭主義でいくこと、であった。その二つは、医学校や病院をつくるに当たっては、その各々が経済的に自立運営できる恒久的な仕組みを考えておくこと（また運営するための必要経費も可及的に小さくできる仕組みも考えておくこと）であった。

このような経験や教訓を生かして、また高木の並外れた精力、手腕によって、その後彼らの計画は次々と成功していった。彼らのつくった研究団体

(成医会)、医学校(成医会講習所)、病院(有志共立東京病院)、看護学校(同病院看護婦教育所)は、それぞれ学術団体・成医会として、東京慈恵会医科大学、同附属病院として、さらに同大学看護学科、看護専門学校として現在まで発展しつづけている。

棟庵が心血を注いだ東京医学会社と慶応義塾医学所は紆余曲折を経た後こうしてようやく成医会と成医会講習所として実ったわけであるが、そのことは見方を変えれば「慶応義塾百年史」(1965)が述べるように「今日の慈恵会医院(初め有志共立東京病院―筆者)は松山棟庵、隈川宗悦ら慶応義塾医学所関係者が、後に志を合わせてその基をつくったものである。すなわち慶応義塾医学所の学流は、今日の慶応義塾大学医学部には伝わらず、反って慈恵会医科大学に伝わったことになる……」といえるのかも知れない。

現在の慶応義塾大学医学部は、医学所廃校後、40年後にやはり福沢諭吉の意志を想起して新たに設立されたものである。

成医会の設立

高木と棟庵は、1880(明治13)年12月、さっそく研究団体・成医会をつくるべくその設立趣意書を作成し、同志20名の医家に送付した。それには「本会ヲ設立スルノ目的ハ学術ヲ研究シ以テ其進歩ヲ謀ルニ在リ蓋シ医術ハ国民ノ疾病ヲ治癒シ且ツ其健康ヲ保護スルモノナレバ医術ノ巧拙ハ国家ノ盛衰ニ関渉スルコト亦甚大ナリ云々」と書かれていた。そしてその団体名は成医会とし、外国に紹介する英語名はSociety for the Advancement of Medical Science in Japanであった。この英語名には、この会を日本を代表する医学の研究、進歩を目指す会にしたいという彼らの気概がこめられているように思われる。

先の設立趣旨に賛同した同志18名は、1881(明治14)年1月7日、事実上空家同然になっていた鎗屋町の医学会社に集まり、ここに成医会が発足することになった。会員には高木兼寛のほか、松山棟庵、隈川宗悦、新宮涼園、安藤正胤、松山誠二、田代基徳ら慶応義塾医学所関係者および戸塚文海、豊住秀堅、鈴木重道、木村壮介、鳥原重義、山本景行ら海軍軍医らがそ

の大半を占めた。そして会長には高木兼寛が、幹事には松山棟庵、田代基徳、隈川宗悦、新宮涼園ら（つまり慶応義塾関係者）がえらばれた。また同会の名誉会員には、高木の上司である海軍軍医総監・戸塚文海、陸軍軍医総監を退役した松本良順が、しばらくして高木の師であったウィリス、そしてヘボン、アンダーソン、シモンズらが次々と推薦された。

成医会の発足日に集まったメンバーを東京医学会社のそれと比較してみると、英国医学を身につけた海軍軍医が会長になったためか、石黒忠恵ら陸軍関係者、長与専斎ら内務省関係者、三宅秀ら東大関係者らの名前が消えた。

最初 18 名であった会員も、3 ケ月後にはすぐに 36 名に倍増し、以後しだいに増えていった。入会金は 3 円、会費は月 1 円という当時としてはかなり高額であったためか、会員のなかにはこれを半額にして一挙に会員を増やそうという意見をだす者があった。しかし会長はじめ幹事はこれにまったく同意しなかった。この会を質の高い純学術団体にするためには目的を同一にする者同士の少数精鋭でいくべきであることに意見が一致していたからであった。これは恐らく、棟庵がかつて東京医学会社を設立した折り、意志の統一をなおざりにしたために会員は増えたが分裂してしまったという失敗を肝に銘じていたためと思われる。

成医会では毎週、研究集会（例会といった）が開かれ、そこでは〔講義〕、〔演説〕、〔詢議〕、〔討論会〕などが行われた。〔講義〕とは、もっぱら高木会長が最新の西洋医学のトピックス（とくに日常の病理学的問題）をシリーズ風にまとめたものであった。ちなみに最初のテーマは「腹水論」（5 回）であった。〔演説〕というのは主にベテラン会員が研究してきた問題を解説するもので、例えば棟庵の最初の演説は「卒中論」（3 回）であった。〔詢議〕（患者供覧検討会）ではやはり幹部会員の松山棟庵、隈川宗悦、安藤正胤、新宮涼園、松山誠二らが代わる代わる患者を同伴してその診断、治療について討論しあった。また〔討論会〕というのは、今日のシンポジウムに相当するもので、一つのテーマについて誰かが問題の在りかを説明し、それについて討論し合うというかたちであった。そしていずれの場合にも最後に高木が立って、最新の医学に基づいて彼の所感を述べるというのがならわしになっ

ていた。

盛会時の成医会例会には日本橋以南の開業医の殆どが出席したといわれる。またある時期には第三週の例会だけは司会、講演、討論などのすべてが英語ですすめられたこともあった。

成医会はその初期から機関誌「成医会月報」を発行していた（慈恵医大雑誌の前身である。第一号は1882（明治15）年1月10日発行）。内容はもちろん成医会例会における講義、演説、詢議、討論会などの要旨や会況の報告であった（間もなく英語版 *Sei-I-Kwai Medical Journal* も刊行された）。成医会月報の編集兼発行者はもちろん松山棟庵であり、その第一巻の巻頭言（漢文）ももちろん彼の作であった。また成医会例会そのものの運営、進行も彼の裁量にまかされていた。

当時の成医会月報の奥付には、

持主兼編輯人 松山棟庵

発行所 東京京橋区鎗屋町十一番地 医学会社

発売所 東京日本橋区三丁目 丸善書店 ほか

と書かれている。発売所が早矢仕有的の丸善書店になっているところも興味深い。もっぱら学問的に編輯している棟庵と実業家として頑張っている早矢仕の友情がそこはかとなく感じられる。

棟庵はこうして、順正書院いらい懐き続けてきた願望、つまり最新の西洋医学に直に接して勉学してみたい（できればそれに貢献したい）という願望は成医会において十分達成されたようであった。彼は水をえた魚のように毎回（毎週）の例会に出席し、その都度の「詢議」に患者を同伴して治療方針の検討に加わった。おそらく彼の生涯のなかでこの4,5年がもっとも充実した時期だったのではないだろうか。

成医会例会における初期の「討論会」で筆者の興味を引いたものに「脚氣病原因問答」と「医風改良案」とがある。その二つを当時の成医会月報から下に抜粋引用する。当時の成医会例会の雰囲気が察しられる。

成医会での脚気論争「脚気病原因問答」 高木は脚気の原因として栄養欠陥説を提出したが、我が国の医学会ではむしろ伝染病説が盛んであり、この高木説に対する批判、疑問が続出していた。そこで成医会例会ではこの問題の在りかを整理するために表題のような討論会を開催した。司会はもちろん棟庵であったが、十数人の討論者が次々と高木説に批判、疑問を投げかけ、高木が一々これに答えるというかたちであった。司会のため討論に参加できなかった棟庵も批判者の一人であったが、討論記録の最後に彼はこのように追記している（要旨のみ）。「自分は脚気の伝染病説に同意している一人であるが、今年（1885）4月に、緒方君（東大衛生学教授）は脚気黴菌を発見し、さらに7月にはテイラー君（成医会会員）が脚気患者血液から同じような黴菌を発見した。これを観ると脚気患者の血液には一種の「バクテリア」が存在していることはほぼ間違いないところである。自分が想像するには、高木がいうバランスのとれた栄養をとっている者にはこの「バクテリア」を殺す力があるが、バランスの悪い食物をとっているものにはこの力がなく、「バクテリア」は増殖し、脚気病を起こすにいたるのではなからうか。したがってこの「バクテリア」こそが脚気病の本源たることはほぼ間違いないところであろう」と。

現在の知識からみて、この棟庵の見解は間違いであり、むしろ高木の栄養欠陥の見解の方が正しかったわけであるが、筆者にはそのことより、会長の学説であろうと誰の考えであろうと、誰憚ることなく自分の意見を自由に述べ合う成医会の明るさに感心するのである。

医師のモラルについてのシンポジウム「医風改良案」 この問題の話題提供者は松山誠二（棟庵の甥、慶応義塾医学所卒）である。彼は当時（明治中期）日本全体にはびこっていたいろいろな医師の悪風を示し、これに対する改善法をくわしく述べている（紙面の都合でここにはごく一部だけを抜粋する）。

松山誠二が云うには「医師の悪風には、金欲にかられて特定の人のために麻薬、毒薬を流したり、時には詐欺、情事に加わるなどの品行上の悪風や、病気の本態を真面目に診断、治療しようとせず、ただ外見だけを尊大に見せかける業務上の悪風があるが、医学界の名誉を守るためには何としてもこれらを改善せねばならない。その

改善法としては、開業免状の与奪を医師会が行えるようにすべきではないか。さらに医学生時代から不品行のものには開業試験の受験資格を与えないようにするべきではないか。そしてもっと大切なことは、医学教育における知識の教育のみならず、広く深い教養を身につけさせるべきではないか」と。

棟庵は別の用件のためにこの討論会に出席できなかったが、編集長として同記事の最後に、「成医会の目的は『医風を改良し、學術を講究すること』にあるのだから、他日必ずこの問題についての自分の意見を披露したい」と付記している（話題提供者・松山誠二の発言がかつて順正書院の代診時代に棟庵自身が感じたことを代弁してくれているように感じたからであろう）。棟庵の意見はどういう訳かその後同誌の活字にはならなかったが、彼がここで追論したかったのは（その後の彼の言動から推して）恐らく医療の「和魂洋才」のことであったと思われる。「洋才」とはいうまでもなく最新の西洋医学のことであろうが、「和魂」とはおそらく「仁愛」（慈悲）とか「独立自尊」（自律）の儒教的武士道的精神のことであったと思われる（後述）。

成医会講習所（Sei-I-Kwai Medical School）

1881（明治14）年3月9日の成医会例会において、高木兼寛、松山棟庵らは医学校・成医会講習所を設けて医師の教育を行うことを提案し、直ちに了承された。その目的はいうまでもなく成医会が提案した「医風改良」を地でいく良医を育てることであった（またその先2月には施療病院・有志共立東京病院の設立趣意書が作成された）。そして実際の教育はさっそく5月1日から鎗屋町の東京医学会社の大広間を借りて始められた。医学会社は先述のように運営不審に陥り、会合もほとんど行われていなかったため、その残務整理の責任者であった松山棟庵が教室として手っ取り早くここを選んだのであろう。そのためその賃貸料もただ同然できわめて安く、医学校を開設するには大変有難いことであった。

講習所のカリキュラムは表3のごとく当時の英国医学校のそれに準ずるものであった。慶応義塾医学所のカリキュラム（表2）が暗唱と読解を主とす

表 3. 成医会講習所の学科目と担当教員

| 学科目 | 担当教員 |
|---|------------------|
| 物理学 化学 飲食物試験 | 木村壮介 高橋秀松 |
| 動物学 | 鈴木孝之助 |
| 薬物学 | 寺島大浩 鈴木孝之助 鈴木重道 |
| | 菅原思朗 |
| 解剖学 | 鈴木重道 木村壮介 鳥原重義 |
| | 青木忠橘 |
| | 鶴田鹿吉 高木兼寛 (脳髄) |
| 生理学 | 松山誠二 鶴田鹿吉 島田完吾 |
| | 鈴木重道 |
| 内科学 [総論 循環系 消化系 呼吸系 皮膚系] | 鈴木孝之助 |
| 内科学 [全身病 泌尿系 神経系] | 豊住秀堅 |
| 内科学 | 三瀧謙三 石黒宇宙治 佐々木文蔚 |
| 外科学 [総論 外傷 咽頭 乳房 脱腸 直腸 肛門 泌尿 生殖 梅毒 関節病 脊椎病 四肢 奇形 脈管 動脈 耳鼻 唇舌 歯 齒根 眼科] | 木村壮介 |
| 外科学 [外傷論 断骨 脱臼] | 加賀美光賢 |
| 外科学 [泌尿器] | 河村豊洲 吉田貞準 |
| 外科学 [関節論 梅毒編 壊疽 炭疽 丹毒 腐敗毒 膿毒 腫瘍 骨病編 外科演習] | 実吉安純 |
| 産婦人科 | 池田泰治 山本景行 実吉安純 |
| | 吉村 晋 |
| 断訟医学 | 山本景行 |
| 衛生学 | 山本景行 |
| 各科臨床講義 | 高木兼寛 |

る日本古来の勉学法であったのに対して、こちらの方ははるかに現代的であった。そして教員の陣容がきわめて豊富なことも慶応義塾医学所と大きく違うところであった。しかも表3の教員のうち松山誠二と三瀧謙三以外はすべて海軍軍医で、その大部分はアンダーソンから教育を受けた新進気鋭であった。棟庵自身は教員というかたちをとらず、隈川宗悦らとともに随時臨床指導を行うということにした。臨床指導ははじめ毎週行われる成医会例会での「詢議」を聴講することであったが、1883（明治16）年9月頃からは有志共立東京病院で患者を前にした実際の臨床実習が行われるようになった。

講習所での教育はきわめて厳格であり、最初100名ほどいた生徒も、少し



写真4. 成医会講習所と海軍軍医学校の共生時代の記念写真
制服を着た軍医学校の生徒と和服姿の成医会講習所の生徒が仲よく記念写真に納まっている。

ずつ減り一年後には20名ばかりに減った。しかしこの試練（4年制）にたえた者は、医術開業試験に落ちることはなく、この医学校の合格率は一頭地を抜いていた。

1882（明治15）年、遂に東京医学会社（建物）は他者に売却されることになったので、成医会講習所としてはその引っ越し先を探さねばならなくなった。幸い、高木は、同年8月からしばらく中断していた海軍軍医学校を再開し（海軍医務局学舎）、その校長に就任することになったので、講習所は同年11月から一先ずその芝山内五号地の軍医学校に引っ越すことになった。引っ越してからは、講習所の生徒と軍医学校の生徒は同じ教室で一緒に教育を受けることになった。洋服（制服）を着た軍医学校の生徒は教室の前方を占め、勝手な服装をした講習所の生徒は後方の席を占めていた。軍医学校を視察にきた海軍卿・川村純義は、この教室の珍風景をみてびっくりしたといわれる。写真4は当時（明治20年頃）のものと思われる記念写真である。

洋服を着た軍医学校の生徒と和服（その他）を着た講習所の生徒が仲良く一緒に写っている。

講習所の教員の報酬については、上述の如く教員のほとんどは軍医でしかも軍医学校の教官であったから（本務の俸給をもらっていたわけで）、講習所としては僅かに弁当代を支払う程度であつたらしい。早い話が成医会講習所は辛うじて軍医学校のボランティアによって成り立っていたわけである。しかもこのような寄生生活をその後8年間も続けたのであつた。

しかしこのような官立の医学校内に私立の医学校が同居している姿は何ともおかしいというので何人かの人から非難をうけた。特に明治21年の生徒募集広告に「東京芝山内海軍軍医学校内、成医会講習所」と書いたことから問題が大きくなり、帝国議会においても、これは公私混同ではないか、と攻撃された。講習所としてももちろん良くないことは承知の上であり、即刻軍医学校から離れることを明示して、何とか事なきを得た。講習所にとっては何か新しいかたちに発展するための我慢の時期であつた。

成医会では、有志共立東京病院（当時は東京慈恵医院に改称）の敷地内に講習所を移転することにした。東京慈恵医院の方は当時皇族、華族の経済的支援によってようやく軌道に乗っていたので、講習所はこの医院の附属というかたちにして、校名も東京慈恵医院医学校（Tokio Charity Hospital Medical School）と改めた（1891（明治24）年）。これで高木兼寛がかつて英国で学んだセント・トーマス病院医学校（St. Thomas Hospital Medical School）と同じ形、つまり病院と医学校が一体となった理想的形になったわけである。

それにしても成医会にはまだ校舎を新築するほどの経済的余裕はなかったので、当時病院を改築中であつた海軍病院からその古建材を譲り受け、それを基に何とか医学校の校舎を建築した。

このような経過をみても分かるように、成医会講習所はその維持発展のためにはできる限り経費の節約を旨とした。医学会社の安い賃貸料、海軍軍医学校への寄生生活、海軍病院の廃材の利用など、これらはすべて経費節約のためであり、その何れもが高木兼寛、松山棟庵の知恵であつた（とくに棟庵

の多くの失敗経験からきていた)。多くの公立私立医学校が経済的破綻のため廃校になっていくなかで、慈恵医院医学校のみが存在し続けられたのは、このような深い配慮があったればこそであった(当時、最大の私立医学校であった済生学舎でさえ1903年には経済的破綻のため廃校になっている)。

有志共立東京病院 (Tokio Charity Hospital)

高木が英国から帰国したとき、医学界全体がドイツの気風、とくに庶民の医療より医学研究を至上とする気風になっていたことはすでに述べた。高木兼寛、松山棟庵らはこのような当時の社会状況から推して先ずやるべきことは施療病院を開くことであると考えた。そしてまずそれについての設立趣意書を作成し、広くその必要を呼び掛けた(1881(明治14)年2月)。

幸い、この趣意書に賛同する戸塚文海、高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦、田代基徳、安藤正胤、新宮涼園、早矢仕有的、豊住秀堅らの多くの同志(36名)を得ることができた。さっそく高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦ら8名はその実現のための創立委員会を結成し、まずその病院名を有志共立東京病院とすることにした。

この有志共立という名称は松山棟庵の発意であったように思われる。彼は過去にも早矢仕有的と一緒に横浜に共立病院(横浜市立大学医学部の前身)を設立したことがあったし、また隈川宗悦と一緒に有楽町に東京共立病院を営んだ経歴もあった。それ以前にも郷里和歌山に英語学校共立学舎を開いたこともあった(1870)。もともと彼は、有志と協力してある目的を達成する“共立”という言葉が好きだったらしいのである。

病院創立委員会は病院の資金を有志者の拠金によって永続することにした。まず戸塚、高木、松山、隈川らは率先して各自1,000円(現在の約1,000万円に相当)ずつを拠出し、その他多くの有志からも申し込みがあって、予約高は優に21,500円に達した。拠金は満5ケ年をもって満期と定め、その利子(1-1.2割)のみを使うことにした。拠金者は社中と称し、年に一度開かれる社中総会に出席し、病院の運営について意見をのべることができた(社中とはfellowの意味である)。

創立委員会は、院長に戸塚文海を、副院長に高木兼寛、また医員には松山棟庵、隈川宗悦、河村豊洲、島田修海、加賀美光賢、松岡勇紀ら6名を委嘱した。病院施設としては当時経営不振に陥っていた東京府立病院（場所は芝愛宕町、現在の慈恵医大キャンパス）を譲り受けることにした。東京府からの払い下げの代価は2,462円73銭3厘であった。

有志共立東京病院の診療は府立病院の施設を使って1882（明治16）年9月から始められた（いろいろの事情があって実際の診療は天光院（寺）を借りて前年8月から始められていた）。当時の医員担当の日割は表4のようで、高木、棟庵の診療日は月曜、木曜であった。建坪868.5坪の病院は外来患者、入院患者で常時超満員であり、彼ら医員は多忙をきわめた。初年度の年間外来患者は862名（1人につき受療39日）、入院患者は211名（1人につき滞在42日）であった（この病院が現在の慈恵医大附属病院に続くわけであるが、現在からみて開院初期とはいえその規模は意外に小さい感じである）。

1884（明治17）年10月、当病院は米国より看護婦リード女史を招いて、看護婦教育を依頼し、また看護婦教育所の取締に任命した。これは日本における看護婦教育の嚆矢であった。その看護婦教育所の設立については、英国でナイチンゲールの業績を十分承知していた高木の意向が大きく影響したと考えられるが、また棟庵の意向も大いに力があつたと思われる。彼もまた自書「初学人身窮理」の中で「医生ヲ教育スルタメニ世ニ堂々タル学校ノ設立アレドモ看病人ヲ教育スルタメニ更ニ学校ノ設立ナキハ実ニ嘆惜スベキコトナリ」と看護教育の必須なることを力説しているからである。

当病院では毎月一回、医員例会なるものを開き、委嘱医員による病院の運営についての意見を交換していた。高木と棟庵はこの例会を休んだことは全くなく、二人だけで会を開くことさえしばしばあつた。病院の運営に日夜精

表4. 有志共立東京病院の担当医表

| | 月曜 | 火曜 | 水曜 | 木曜 | 金曜 | 土曜 |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 内 科 | 松山 棟庵 | 松岡 勇紀 | 隈川 宗悦 | 松山 棟庵 | 松岡 勇紀 | 隈川 宗悦 |
| 外 科 | 高木 兼寛 | 加賀美光賢 | 島田 修海 | 高木 兼寛 | 加賀美光賢 | 島田 修海 |

力をつかっていたこの頃が棟庵の生涯にとって最も充実した時期ではなかったかと思われる。

しかし病院の運営が華族の「婦人慈善会」に移り、さらに皇后の財政的支援を受けるようになった頃から（明治20年ころから）、棟庵の例会への出席は次第に悪くなり、診療活動からも遠のいていった（同時に成医学会例会への出席も悪くなっている）。恐らく後述する啓蒙的な講演に出掛けることが多くなったせいだったのかも知れない。

社中総会で戸塚文海院長の引退を提言 戸塚文海（1835-1901）は緒方洪庵、ポンペ、ボードインに医学を学んだ大先輩であり（また海軍医務局長として高木の先任者でもあったから）、戸塚の院長、高木の副院長は至極当然であったが、当時すでに戸塚は老齢であったためか院長らしい仕事がほとんど出来なかった。そこで病院の医員たちには院長に対する不満が多少燻っていたらしい。病院の運営上これはまずいと思った棟庵は、病院の社中総会（1885（明治18）年10月）において次のような提言を行なった。「ソモソモコレマデノ院長ハ、ソノ名目アルノミニシテ、ソノ実本院創立以来スベテ副院長ノ担任セラルル処ニシテ、今日カク盛大ニ至ルコレミナ副院長ノ尽力ノ功ナルコト諸君ノ知ラルルトコロナレバ敢エテ演述セズ。依ッテ余ハ本会ニオイテ諸君ト共ニ推シテ副院長ヲ院長ニ改選セラレンコトヲ希望ス」と。

実際には院長交替の件は副院長・高木に一任され、その後1887（明治20）年4月になって始めて高木が院長に就任したわけであるが、その事実よりもここでは、この棟庵の言葉をこの病院の維持運営に対する熱心な忠告、勧告として受取りたい。棟庵は、この病院をふくめて、一つの組織を力強く維持発展させるためには、（一見無情にもみえる）リストラが絶えず必要であることを力説したかったのではなかろうか。合理主義者としての面目がよく現れている。これがかつて失敗した幾多の苦い経験からきているのであろう。

4. 医師、一般市民のための啓蒙講演

コレラや天然痘などの伝染病は、ようやく近代化をすすめていた我が国の衛生行政にとってきわめて厳しい試練になった。これに対処する要件はまず民衆に対する衛生思想の普及であった。大日本私立衛生会はそのために結成された組織であり（1883）、その目的とするところは「全国民の健康を保持促進する方法を討議講明し、一には衛生上の知識を普及し、一には衛生上の施政を翼賛する」ことであった。棟庵や高木はもちろんこれの結成に参加したが（会頭・佐野常民、副会頭・長与専斎、幹事・高木、棟庵ら）、さらにその支部である芝私立衛生会の結成にも大きく貢献した。

棟庵も、この私立衛生会の主催する講演会にはしばしば参加し、多くの講演をおこなった。彼の講演を一つ追うことはできないが、ここには幾つかの演題のみを列記する。年代順に、「毒トハ何物ゾ」「血液ノ循環」「はしかノ話」「婦人衛生一斑」「人身変悪ノ原因ヲ論ズ」「衛生マタ勉強ニ在リ」「空気ノ話」「健康ト疾病トノ関係ヲ論ズ」「痢ノ話」「疝気ニ就イテ」「神経ニヨッテ病ヲ起コスナカレ」「神経系ノ話」「衛生上ノ美人如何」「健康長寿ハ果タシテ衛生ノ目的ナルヤ否」「医師ノ義務」「伝染病予防論」（以上芝私立衛生会で）、「衛生法普及ノ考案」「私己衛生一斑」「日本服ト洋服ト衛生上利害如何」「下愚人ヲ減少スルノ考案」「衛生ノ実益ハ俗間ノ惑ヲ解クニ在リ」「衛生活法」「健康長寿論」「衛生上東京市区改正ノ必要を論ズ」（以上大日本私立衛生会で）などである。

最後にあげた「衛生上東京市区改正ノ必要ヲ論ズ」（1885）は、棟庵の医学思想をしめすものでもあり、またこれを中心に森鷗外との間でおきた論争も有名であるので、以下にごく簡単にその要旨を述べる。

維新いらい明治政府は、新首都・東京の近代化を急いでいたが、それは東京をはやくロンドンやパリなみの近代都市にして、悪名たかい通商条約を改正せねばならなかったからであった。新しい都市計画がいくつかだされたが、問題は東京の中心を占め人口の大半を占める貧民の街（スラム）をどう

処理するかにあった。この問題にたいして、棟庵は凡そ次のような見解をのべた。「まずスラムの不衛生な状態はとても話にならない。貧民は大体が無学であり、衛生の何たるかを知らない。しかも宵越しの金はおたぬといった惰性のため極貧である。今から彼らをして富をなさしめ、勉学させ、自ら衛生事業を十全ならしめるには何十年かかるか分かるものではない。もし都市計画を急ぐのであれば、彼ら貧民を少なくとも新都市の中枢部から駆出せねばならない。何か駆出のいい方法はないか」というものであった。そしてこの駆出の方法について意見を提出したのが高木兼寛であった。「都市の中枢部には税金を幾らか高くし、郊外には安くすれば、無理をせずとも郊外に自然に移動する」というものであった（937頁「高木兼寛の都市計画案」参照）。

この棟庵、高木の一連の提案にたいして痛烈な批判をくわえたのが森鷗外であった。「貧しい労働者階級を不当に遇すれば、どのような結果になるか、分かっているのか」と怒ったのである。鷗外は社会民主党の進出のはげしいドイツに留学していたため、民衆の怒りの怖さを十分知っていたのであろう。

この論争そのものについては本小論の論旨から外れるのでこれ以上深入りしないが、それよりもここではこの棟庵の提案から彼の思想を一寸窺ってみたいのである。この講演で一つ気がつくことは、棟庵は貧民、庶民を自分の属した階級（下級武士、豪族）から一段下に見ていることである。このことは若干気にならないでもない。しかしどうであろう、これも見方を変えれば、彼が三十過ぎまで封建社会で呼吸をし、また自らの階級が明治維新、自由民権運動を力強く推進していたことを考えれば、これくらいの自負は当然だったのかも知れない（実際その後も明治—大正時代を動かしたのは紛れもなくこの階級であったのである）。

この棟庵の思想には師・福沢諭吉の影響も当然あったと思われる。福沢も「学問のすすめ」で「国ノ文明ハ上政府ヨリ起コルベカラズ、下小民ヨリ生ズベカラズ、必ズソノ中間ヨリ興コリテ衆庶ノ向カウトコロヲ示シ、政府ト並立チテ始メテ成功ヲ期スベキナリ」と云っているからである。この中間層

の位置に下級武士，豪族が置かれることはいうまでもない。またこの位置は「非官非俗」の位置と名付けてもよいであろう。

棟庵が施療病院・有志共立東京病院を高木らと一緒につくったときも，貧しい病者を何とか救ってやらねばといったエリート意識があったことは確かであろう。自ら「町人医」を標榜しながらも，視点はやはり貧民より一段高いところにあり，その位置から仁愛をもって病者を診てやろうという姿勢があったのは確かである。先にも述べたことであるが，彼の「和魂洋才」の「和魂」はやはり儒教的武士道の精神であったと思われる（その意味では「士魂洋才」というべきかも知れない）。

5. 松山棟庵の人となり

棟庵は七男六女の子福者であった（写真5。第三男は幼時に死亡）。息子

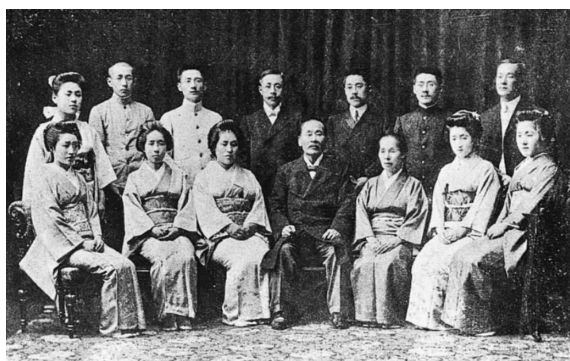


写真5. 松山棟庵家族の記念写真

1907（明治40）年7月8日撮影。前列右から 四女・とし子，五女・みね子，信子夫人，棟庵，長女・ぎん子，次女・小英，三女・くみ子。後列右から 次男・信二郎，六男・陸郎，四男・得四郎，長男・陽太郎，五男・七五郎，七男・庄七郎，六女・とみ子。

棟庵のすすめで長男・陽太郎（本学明治28年卒），五男・七五郎（本学明治40年卒），六男・陸郎（東大医明治42年卒）の三人が医者になった。また陽太郎と陸郎はそれぞれ本学の内科と外科の教授に就任した。

たちが棟庵に将来の進路について相談すると、彼はいつも「医者のほかは大学を卒業して出世しても大抵は重役どまりであり、終生人に頭を下げねばならぬ。そこへ行くと医者は独立独歩の職であり、五斗米の前に身を屈するようなことはなくてもすむ。男の仕事としては人に使役されるでなく独立独歩が望ましい」と答えたという。謂れなき低頭は嫌いであつたらしい（その助言にしたがって六人の男子のうち三人、長男・陽太郎、五男・七五郎、六男・陸郎が医者になっている。そしてそれぞれ松山病院の院長、産婦人科部長、外科部長をつとめた。また陽太郎と陸郎は慈恵医学校のそれぞれ内科と外科の教授になって父・棟庵の遺業を継いだ）。

先に述べたように棟庵は、施療病院（有志共立東京病院）の運営主体が皇族、華族、政治家に移るころから、次第にその医員例会への出席が悪くなり、診療活動からも遠のいていったが、それはやはり色々な場面での謂れなき低頭、気配りが嫌だったのかも知れない。高木が鹿鳴館社交（園遊会、舞踏会）に盛んに加わっていくのに対して、棟庵はそっぽを向いているようにみえるのも、何かそれを象徴しているようにも思われる。

福沢諭吉も、あるパーティーに招かれたとき、政治家のスピーチが政治家であるが故に自分の先にあるのを知って、そのパーティーを欠席したと云われるから、その気概は弟子の棟庵にも影響していたのかも知れない。

棟庵の性格には、上にも述べたように何か特別なところがあり、ある団体の結成や学校の創立に一度取り掛かると、まるで狂人のように突進し、それが成功するまでは余事をまったく顧みないという風があった。自宅で翻訳、読書、詩作などをする場合でも静かな所を選ぶということはなく、多くの子供たちの騒然喧然たる中に座して、平然と読書し、詩作したといわれるから、何か物事に熱中すると回りに何が起ころうといささかも煩わされることはないらしいのである。これは趣味の領域においても同様で、彼の趣味といえば囲碁、将棋をはじめ義太夫、長唄、謡曲にいたるまで極めて多種多様で、しかもいずれも素人の域を脱していたが、そのいずれについても周囲の喧噪は彼に何の影響もしなかったといわれる。

こうした突進性をもつ反面、彼には、成功した事業にたいしては全く執着

しないというこれまた俗人にはみられない性格があった。創造欲というか新設欲というか、一つの仕事が完成すれば、これを仲間に委ねて、次の仕事なり、研究に向かって突進して行くのである。彼は、上述のように、我が国医学界の団体創立や病院創始には必ずといっていいほどその基礎工作に狂奔しているが、表面にたって会長などになったことは一度もなかった（小さい芝私立衛生会ですら芝区長を会長にして自分は副会長に納まっている）。要するに名誉欲、権力欲めいたものには意識的に近づくかないといった気風があったのである。これもやはり師・福沢諭吉に由来するのだろうか。

棟庵には、福沢諭吉の死後その遺書を読み、感銘してつくった次の漢詩がある。

| | |
|---------|---------|
| 自是文明第一宗 | 著書千卷破冥朦 |
| 詞章平易伝真理 | 論談懷奇煥大公 |
| 爵位脱然如弊履 | 人生聊欲比昆虫 |
| 老来深契修身法 | 子孫団欒樂地中 |

福沢が終生、官に仕えず、爵位、勲章、学位等の噂があれば、ただちにこれを辞退したことはよく知られている。

棟庵は身体的にも人並みはずれて頑健で、とくに健啖家であった。こんなエピソードが残っている。当時の小田急社長某も健啖家で有名であったが、ある日棟庵宅で一緒に夕食を食べて散歩に出たが、すぐに鰻屋に飛び込んで鰻丼を三つずつ平らげ、その足で寿司屋に入るとそこでもまた三人前ずつ平らげ、さらに家に帰るとお茶漬けを四五杯やったという。その時は流石の社長もお茶漬だけは手が出ず、棟庵にシャッポを脱いだといわれる。

1919（大正8）年、棟庵は81歳になった（当時としては並外れて長命であった）。歩行が多少困難ではあったが、別に案ずることはなかった。ところがその12月12日、彼は朝早く床を出て、便所に行き、戻って再び床の上に座

し、夫人に向かって快通があったことを告げた後、そのまま床の上にうつ伏せになった。別に苦悶するでもなく、呻き声を出すでもなく、その動作はきわめて静かで自然であったという。義齒が脱出しているのに気がついた夫人は、怪しみながら掌をあててみるともうすでに息は絶えていた。死因は心臓麻痺と診断された。

充実した人生を終えるに相応しい、まことに棟庵らしい大往生であった。朋友・高木兼寛もその翌年（1920）同じところに旅立った。